

# 港北区災害ボランティア連絡会ニュース

事務局 〒222-0032 横浜市港北区大豆戸 13-1 吉田ビル 206 港北区社会福祉協議会

TEL 045-547-2324 FAX045-531-9561

HP <http://kouhoku-saibora.jimdo.com> FB 港北区災害ボランティア連絡会

\* 入会は随時受け付けています。あなたの町の防災度を高めるためにお力を貸してください

第 63 号

2018 年 3 月



## 7 年が過ぎたけれど

3 月 11 日には被災地をはじめ、全国各地で祈りが捧げられました。新しい生活を初めても、失われた命、生活、思い出は取り戻せません。皆さん身をよじるほどの哀しさと切なさや後悔を抱いてこの七年間を暮らしてきたのかを想像するに、その辛さは想像するにあまり有ります。だからこそこの被災者も「こんな辛い想いはしないで」と防災の大切さをおっしゃいます。その言葉をどう受け止め、実践するかが私たちの使命だと思います。

東北各地は安心を求めての高台移転や土盛り等の工事に時間がかかった関係で、若い人を中心に人口流出に悩む地域が多く、今後の街づくりの難しさに繋がっています。衣食住の住の早い確保が衣食の確保に繋がるのですが、それが果たせない実情は住民の心に大きな疲れを生み出しています。

### 考えよう、地元の防災を

横浜市での災害を考えると、膨大な人口と都市化の街は、十分な避難所や仮設住宅の確保は難しくしています。また日本の避難所の環境の悪さは難民キャンプ以下です。私たちは体育館で雑魚寝する光景を当たり前のもので受け止めがちですが、あの環境を改善する動きも作り出す事も考えないといけません。発災すれば多くの住民が殺到して、一人 1m×2m のスペース確保などとても無理でしょう。

イタリア地震報告で驚かされたのはあの国の対応の素晴らしさでした。発災翌日にはシャワールーム付きの仮設トイレが到着するよう



ハリケーンカトリーナ避難所風景（フロリダ）

## 被災地の苦悩は続くー



被災地で祈る（郡山市東原復興住宅で）

に備蓄されているそうです。また避難所では食堂テントが設置され、暖かいパスタやステーキ、ワインまで提供されるとの事。信じられない報告であると同時に、日本の常識にとらわれてはいけなさと強く思い知らされました。

南海トラフで予想される住宅被害は 238 万戸、復興に必要な予算は 162 兆円という数字が災害経済学者から出されています。この金額は東日本大震災の復興予算の 5 倍です。減災の重要性が言われる所以です。

### 支えよう、被災地を

被災地からは以上の様な様々な教えを貰う事ができました。私たちは常総市とのおつきあいの中から多くの事を学んできました。しかし支援を待つ地域は多く、私たちは未だ十分な事が出来ていません。大阪にいる会員からは、物理的な距離が関心の濃い薄いにつながるのではないかと、との感想が届きました。東北は遠く、熊本はもっと遠くに有ります。それをどう乗り越えるのかを皆さんで共に考え合っていきたいと思います。東北や熊本の姿は明日の私たちの姿でもあり、その嘆き、後悔は明日の私たちの姿でも有るかもしれません。かけがいの無い命、大事な暮らし、無くしたくない大切な想いでやっつながりを失う事が災害です。そのような辛い目に遭う事の無いよう、連絡会の仲間同士で、友達で、ご近所で、災害支援や防災の取り組みに点いて語り合いたいものです。（宇田川）

# シミュレーション訓練で目指した事

昨年の反省を踏まえて今年は

1. 練習のための練習ではなく、なるべく実践に近いものにする

2. 目的は、災害時にボランティアセンターを運営できるようになるためであり、その目的を達成するためには、年に一度の練習では困難なので、シミュレーションでやることを、1年を通して毎月の定例会で行うこととしました。

2を達成するために、定例会の前にタスクチームで集まり、打ち合わせを重ねるなど、チームとしても年間を通してシミュレーションにかかわることができて、知識が深まったように思います。訓練も毎年行われているような受付の練習などではなく、ニーズをヒアリングし、実際にニーズ票に記入するなど、限られた時間の中でしたが、より中身が充実したものであったとも思いました。

災害ボランティア連絡会の大きな目的の一つは、災害時の円滑なボランティアセンターの運営であるのであれば、シミュレーションはとても大切なものであるとすれば、タスクチームの限られた人数で準備するのではなく、毎月の定例会の前の準備は持ち回りで全員でやるとういと思えました。それにより、連絡会全員の知識が深まるとともに、内容もより充実したものになるのでは、と感じました。

方針はタスクチームで決めて、準備などの実行は全員で分担して行う、この形が組織として機能するのでは、という感想を持ちました。

ともかく、今回の経験を生かして、次回はよりいいものにしていければいいなど、思いました。



た。(木村)

## 災ボラ訓練に参加して

今回、初めて災害ボランティア連絡会の訓練に参加しました。普段の区社協業務の中で、ボランティアの依頼受付やコーディネートを行っていますが、災害時のそれは、普段とは全く違うことに気づきました。電話がつながりにくい状況が想定されるため、1回のヒアリングで必要な情報を正確に把握することが普段よりも求められます。依頼の数や緊急性も高くなると思います。活動者自身も被災者かもしれません。

災害ボランティアセンターの状況をイメージすることができたことが、今回の訓練に参加しての成果だと思っています。災害はいつ起こるか分かりませんが、常にそれを想定し、訓練をすること大事だと思います。 区社協高須 茜

## DIG から DIT へ

### 横浜災害ボランティアネットワーク会議 災害図上訓練

◎今回の図上訓練は「DIG」からトレーニングの意味を持たせた「DIT」として進められました。この日参加した人たちが「DIG」を指導する力を持つことで、地域の災害ネットワークの皆さんや住民の皆さんに被害想定を考えるきっかけを作ろうというものでした。

参加者の情報共有と、海あり山あり埋立地ありと、様々な被害が想定されるという観点から金沢区をモデル地区として取り上げ訓練しました。

「グーグルマップ」や「今昔マップ」などを使い、埋め立て前や現在の多くの建物が建設される前の様子を現在と比較確認して、大まかではあるけれど被害想定を考える材料としました。その上で地図に被害想定（元禄関東地震被害想定から）・等高線・防災拠点などを落とし込みました。

次に地図に落とし込んだ想定から考えて、ボランティアセンター設置場所をグループごとに検討しました。ボランティアセンターの設置条件は ①社協・行政との連携 ②建物と周辺の立地 ③アクセス条件 ④テント、資材置き場、駐車スペース ⑤PC機器などのハード面等が考えられます。私の参加したグループでは様々な情報から「横浜市大」を候補にしましたが、やはり「いきいきセンター金沢」しかない

という結論を出したグループもありました。

このように、よく言われている「想定外」ということがないよう様々な場合を想定してⅠ案がだめならⅡ案、Ⅱ案がだめならⅢ案と何パターンも想定しておくことと、町の状況を普段から積極的に見聞きしておくことなどに加えて、繰り返し訓練することにしか災害に向かう方法はないのではないかと改めて認識しました。(付岡)

◎横浜市内各区の災害ボランティアネットワーク連絡会会員や行政職員、社会福祉協議会職員ら60名が参加し、熱心に話し合いながら取り組みました。

訓練では元禄型関東地震が発生した際の金沢区を想定。グループごとに分かれた私たちは、津波や揺れによる被害予想のデータを参照し、考えられる被害状況を地図へと書き込んでいきました。すると、ボランティアセンターの設置場所として候補になる区社協の建物は、津波による浸水の危険にさらされていました。「別の場所を検討しなければならない」――。

災害時に港北区では区の災害ボランティア連絡会と区役所、区社協が協議して災害ボランティアセンターを設置します。そのとき、私は区社協職員として訓練のような状況に直面するため、今回のような訓練へ参加し、知識と技術を高めていきたいと考えています。また、普段から地域の方と一緒に福祉の推進にあたり、日ごろのつながりから災害時にも迅速な対応ができるよう努めます。(遠田)

## パルシステム神奈川 ゆめコープは

パルシステムさんは神奈川県災害ボランティアネットワークの会員として災害時対応を考えています。本部が新横浜にあることからオブザーバーとして当会に来てくれています。

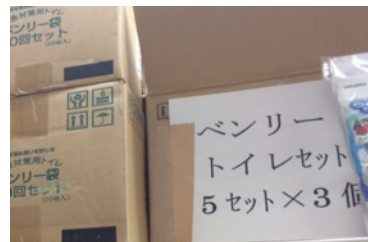
新横浜駅前には新幹線の乗降駅でもあり、現在約13万人/日(JR・地下鉄合計)の利用があります。今後、相鉄線の延伸などでますます利用者が増加することが想定されています。横浜アリーナや日産スタジアムでのイベント開催時に災害が発生した場合は大きな混乱と大変な数の帰宅困難者が想定されます。

当組合(パルシステム神奈川ゆめコープ)は、新横浜3丁目に「本部」があり、常時100名

前後の職員が勤務しています。3・11東日本大震災の当日は近隣に住んでいる職員以外は帰宅困難者となり、徒歩で帰宅する者、自動車と相乗りして帰宅する者などが数十人発生しました。深夜に公共交通機関が一部運転を再開しましたが、最終的に帰宅できない者もおりました。この反省を踏まえ、「安易に帰宅させない」方針に変更し、職員向けの備蓄品(食料や毛布など)を整備しました。

港北区が各交通機関、ホテルその他の民間企業と結成している「新横浜駅周辺混乱防止対策連絡協議会」の災害発生時の訓練に参加した際にも「膨大なイベント参加者を帰宅させるのも大変な状態を想定して、新横浜の企業から帰宅困難者が一斉に新横浜駅に向かった場合、交通整理が輻輳的に混乱するだろう」と言われておりました。

我々も新横浜の一員として引き続き災害対策に取り組んでいきます。皆様も先ずはご自分で出来るところから災害対策をはじめてみては如何でしょうか。



緊急対策用ベンリー袋(便を固め匂いを封じる)これは「緊急用トイレ」です。水を使用しないトイレなので、保管には便利です。



飲料水は「5年保存水」ですが、保管ダンボールに大きく「2019年」と印刷されているので、使用期限がわかりやすくなっています。

(中沢昌彦)

## 障害者防災リーダー 養成講座

2月7日横浜ラポールで「障害者防災リーダー養成講座」が開かれました。過去の災害時に障害者支援の経験の豊富な大阪の「ゆめかぜ基金」と名古屋の「AJU 自立の家」を講師に具体的な事例から考えました。障害の特性を理解しての細やかな支援の必要性を認識させられた講座でした。

参加した畔柳さんからの感想です。

私は障害当事者の親として地域の防災活動に関わっています。今回は被災地の障害者の様子が知りたくて受講しました。講座の中で1番

印象に残ったことは、被災地の障害者支援に入られた方が、まず障害者を探すことから始めたというお話でした。訪れた避難所には障害者の姿がなかったというのです。行政からは全く情報が入らず、地域も障害者を把握できていなかったそうです。支援に入られた方は「困っている障害者は必ずいる！」と、被災地を回り情報を集められたそうです。障害によって困り事は違うし、コミュニケーションの取り方にも工夫が必要になり、知識を必要とする大変な作業です。近所の方々とつながりを持つことの大切さを改めて感じられました。グループワークでは、さまざまな障害の事例を基に支援のポイントを話し合いましたが、福祉の知識がない健常者ではイメージできない事が多いということに気付かされました。地域には知識のある方は少ないです。グループワークからも、当事者や家族が地域と積極的に関わり、一緒になって障害者支援の仕組みづくりに取り組んでいく事が大切だと感じました。また、題材として使われた東日本大震災での事例1つ1つから、避難所生活の過酷な状況が伺われ、災害の怖さを再認識させられました。被災するということをイメージすることが出来、色々な面から為になる講座でした。(畔柳三笑)



車椅子利用者も多かった参加者

## リレー連載 我が家の防災 ⑪ 中島さんちの防災

最近、報道されている「大災害発生」の予測情報に接し不安もつりますが“備えあってこそその防災”をしっかりと心掛けていきたいと思っています。

1. 身の危険を守る…ガラス飛散防止フィルム整備・家具転倒防止器具を全ての家具に設置
2. 火災を発生させない…煙感知器の設置
- 3.

インフラ停止に備えて…飲料水の確保(常時ペットボトル飲料 300程度)、食料品の備蓄(カセットコンロ・災害食多数を年一度入替え)、照明として電池式ライトを各部屋に設置

そして、我が家の防災の仕上げは各部屋に備えたスポーツバッグです。中には、ヘルメット・靴・手袋・懐中電灯・笛・飲料水・薬・インスタント食品など、これで安心！！

もう一つは生活用水の備えのことです。皆さんのお住まいの近くに井戸はありますか？我が町内会には敷地内に戦後は2軒に1本の井戸が掘られていました。今では数も減って残り少なくなっています。しかし現在も井戸水は湧き出ていますので、もし非常時にお役に立つのなら町内の皆様と協力して井戸の水質検査を横浜市に依頼しようと思っています。とにかく“備えあってこそその防災”を心掛けて生活したいと思います。



各部屋に備えたスポーツバッグ

(中島美奈子)

### 編集後記

☆1, 17, 3, 11 忘れません。忘れないためにはしつこく、かつ上手に伝える事を続ける事でもあると思います。(宇田川)

☆3, 11 は赤坂から自宅まで徒歩。バッグに常備の手回しライトが役立ちました。

(室伏)

☆7年が経ちました。海岸が見えなくなった場所が出てきています。防災か、減災か。被災地の方にも答えは無いように思えます。原発被害の福島県が一番遅れています。

(中島)

☆7年目を迎えた3, 11、私はあの時玄関先で友人と話し込んでいました。すごい揺れは今でも身体に記憶しています(付岡)